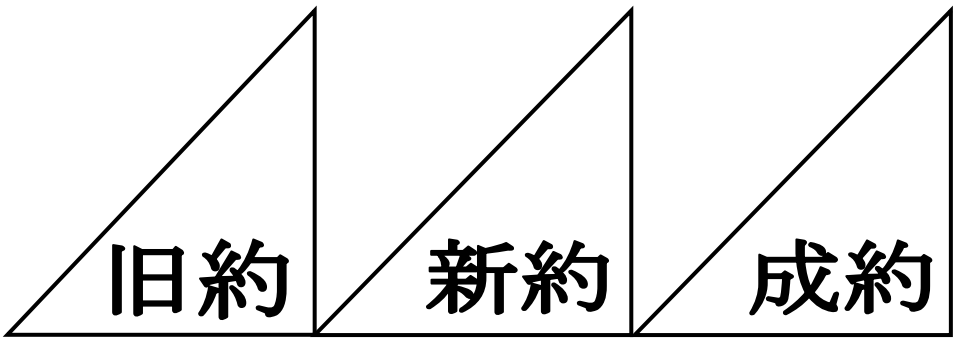
23. ユダヤ教とキリスト教の教理比較

〈アモス書８：11～14〉p.1277
主の御言葉を聞く飢饉がある。霊魂が干からびてしまう。それがまさしく終末。
〈ローマ 12：2〉p.249
この世と妥協してはいけない。真理を、神様を求めなさい。神様が送った使命者をとおしてでしか神様の御心がわからない。理想世界も成せない。
〈コリント人への第一の手紙２：8〉p.258
イエスがキリストであることがわかったら十字架にかけなかっただろう。
ユダヤ人は文字通り信じていたし、預言を解けなかった。ユダヤ教もキリスト教もメシアを待ち望む点では同じ。ユダヤ教のときに預言されたものがどう成就したかを解いていかないといけない。

＜四大教理＞
１．キリスト降臨（雲に乗って現れる）
２．火の裁き
３．復活
４．地上天国

１．キリスト降臨（雲に乗って現れる）
〈ダニエル書７　：13 ～14〉p.1234
雲には物理的に乗れない。
〈黙示録 17：15〉p.403
淫婦＝穢れた人類
イエスはユダヤ教という雲からやってきた。
ヘブルへの手紙 12：1
雲＝御言葉で浄化されて証する人
マタイによる福音書 24：30
再臨主はクリスチャンの中から

２．火の裁き
イザヤ書 66：15～16
火とつるぎをもって…
エレミヤ書５：14
私の言葉を火とし…
エペソ人への手紙６：17
御霊のつるぎ＝御言葉
ルカによる福音書 12：49
イエスは放火魔ではなく、御言葉を伝えに来た。
イザヤ書 13：9～10
日月星が落ちる。
創世記 37：9～11



日＝外的な指導者、月＝内的な指導者、星＝ついていく人々
旧約では日＝モーセ、月＝エリヤ、星＝イスラエル民族

新約では日＝イエス、月＝弟子、星＝クリスチャン
ペテロ第二の手紙 3：10～13
日月星が落ちる天変地異を信じている人をいう。
教理がわからないと正しくメシアを迎えられない。

３．復活
イザヤ書 26：19
メシアが来ると死者が復活すると今も信じている人がいる。
マタイによる福音書 15：11～24
放蕩息子の話。
父親＝神様
弟＝異邦人
兄＝律法学者、祭司長ら
※死は関係性が切れていたこと。
コリント人への第一の手紙 15：20～24
旧約：アダム
新約：イエス
成約：再臨主

霊魂が病んでいるから飢饉が起こる。旧約が墓の時代だった。イエスはその初穂として完全なものとして甦った。しかしイエスは３年半で亡くなったので、再臨主が送られる。
復活はメシアの御言葉で復活する。新しい時代に生まれ変わることが復活。
ヨハネ 5：24～29　p.143
イエスの御言葉を聞いた人は長生級でパラダイスまで行ったが、今はどうだろう。
テサロニケ第一 4：16～18
ラッパなど口に関係するのは御言葉のたとえ。空中引き上げは肉的にではなく、地球は宇宙から見たら空中。霊的次元が天の次元にまで引き上げられる。だから空中で主に会う。

４．地上天国
イザヤ書 11：1～9
イエスはエッサイの家系。イエスの預言。イエスが来たら動物天国か？
創世記 49：1～28
ヤコブの遺言。個性に応じて子を動物にたとえた。メシアのもとで復活したら個性の天国。イエスの元には漁師、取税人、娼婦、百卒長などがひとつになった。
イザヤ書 43：18～21
荒野に道、砂漠に川とあるが、荒野のように道無きところに真理の道を作り、砂漠のように乾ききった霊魂に命の水の御言葉を与えた。
黙示録 20：4～6
キリストと共に千年の間支配する→千年王国
ルカによる福音書 17：20～21
ユダヤ人は見える形での天国を望んでいた。
マタイによる福音書 13：31～33
からし種・パン種のたとえ
個人→家庭→民族→世界
個人→世界など飛躍は無い。根本の次元で一人一人が神様とつながらないといけない。神様の法律がないと世の中も人も治められない。
コリント人への第一の手紙 12：12～14
キリストはかしらだから、人間だけでやると首無しの死人。歴史は真理の御言葉で育つ。脳から指令がいかないと正常に機能しない。肢体の各部がバプテスマのヨハネ。
ヨハネによる福音書 16：12～13
キリストが降臨し、火のような御言葉で裁き、復活し、地上天国をなす。
ヨハネによる福音書 8：32
救われたことが自由。どんなものでも神様を証できる。古い時代の獄から開放されたから自由。その御言葉と遣わされた方の価値をわかって生きなければならない。